

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 当ディスクが「ソリストとしてのデビュー盤」となる濱田あやは、ジュリアード音楽院古楽演奏科を最優秀の成績で了えたチェンバロ（ハープシコード、クラヴサン）奏者で、主な師としてはケネス・ワイズ（ニューヨーク）、スキップ・センベ（パリ）の名が挙げられ、またビエール・アンタイ、クリストフ・ルセにも教えを受けている。18世紀フランスの重要なクラヴサン奏者＝作曲家、ジャック・デュフリ（デュフリ）の作品集を録音するにあたり、濱田あやは、縁あってひとつの恩恵を得た——故グスタフ・レオンハルトが愛用した「ニコラ・ルフエール／マルティン・スコヴロネック」の銘器チェンバロの使用を、特別に許されたのである。これは、現代ドイツの名工スコヴロネックが「18世紀フランスの製作家ルフエールの作品を修復したもの」との触れ込みで世に出されたが、じつはそれは嘘で、エムシユのクラヴサンをモデルに製作したスコヴロネックのオリジナル・レプリカであったことが後に判明した。ともかくも、素晴らしい音調を持つチェンバロであることは、当盤を一聴すれば確かめられる。そして、濱田あやの伎倆とセンスも、この銘器に恥じるものではない。あるいは華やかに、あるいはしじみじみと、デュフリ作品の魅力のなたはずまいを描き上げていく彼女の演奏は、これが「ソロ・デビュー」とは思われぬほど、奥行きある美感に満たされたものである。この人もまた、日本の古楽演奏界を新鮮な息吹で彩る存在と言えよう。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】2014年、パリでの録音。会場は「礼拝堂」とされているのである程度ささやかなる音であるが、ここにはあま自身音が作られているようだ。ただしマイクが近めなためか、楽器からのノイズ、特に低域ノイズがかなり大きく、またこれも距離からか高域も少々かため、特に8+4フィートではかなりにぎやかになっている。(88)



THE RECORD GEIJUTSU
特選盤

■デュフリ／クラヴサン曲集

【①ラ・ララール②シャコンヌ③メデ④三美神⑤ロンドー⑥ガヴォット⑦ラ・ランツァ⑧ラ・ド・ヴィルヌーヴ⑨ラ・ド・ブロンブル⑩ラ・フォルクレ⑪ラ・ブコン⑫ラ・ボトウアン⑬ラ・ド・ヴォカンソン⑭ロンドー 八長調】
濱田あや(cemb)
[ライヴノーツ◎WWCC7784] ¥2500

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 デュフリはルイ16世の治世に生きたフランスの作曲家。最も有名なのは、『三美神』だろう。濱田あやはジュリアードで学んだ気鋭。使用楽器が面白い。以前レオンハルトの近い筋から聞いていたが、まさかこの楽器の新録音が出てくるとは思わなかった。フランスの名工ルフエールが1755年に製作し、レオンハルトの盟友で製作家のスコヴロネックが修復した歴史的銘器として知られ、レオンハルトが数々の録音に用いたところがこれ、スコヴロネック自身のオリジナルだったのだ。2002年に彼自身が公表して欧州の古楽関係者の間で話題になった。どうやら2人で申し合わせて、オリジナルと複製の違いの分かる人がどれだけいるか試してみようというジョークだったらしい。製作年も彼の55番目の楽器だからというのが笑える。でもこの濱田あや、1曲目から目も覚めるような鮮やかな演奏を聴かせている。テンションが高く、幽玄優美なデュフリイメージがあっけなく覆される。まるでフォルクレのようだ。《メデ》が凄まじい。夫に裏切られ、それを仕組んだ王と王女、さらには自分の子供まで殺害するギリシア悲劇の王女の激情が迸る。《三美神》は奥深い甘美な音色と憂いに満ちたアーティキュレーション。総じて鮮やかな指回りと明晰な解釈、疲れを知らないエネルギー。本当にすばらしい。天晴れスコヴロネック！